

幼児の事故の実態と母親の安全意識

猪野郁子*1・石川好恵*2

Ikuko Ino, Yoshie Ishikawa

A Study on the Mother's Security Consciousness and Children's Accidents

[KEY WORD : 不慮の事故, やけど, 転落落下, 誤飲, 安全意識]

1 はじめに

子育て中の母親に焦点を当てた雑誌には、子どもを事故から防ぐためのさまざまな商品の紹介がなされており、しかも実際にそれらが家庭に取り付けられているという。清水玲子は、こうした現象について具体例をひいて、母親たちの過敏ともいえる事故防止対策に警告を発している^{1, 2)}。

それではこのような対策に比例して実際に事故は減少しているのだろうか。

幼児の事故を不慮の事故死率からみると、確かに年々減少している。しかし、死因の第一位であることはここ20年変わらない³⁾。幼児の不慮の事故死の多くは溺死と自動車事故によっているが、溺死はやや減少傾向にあるのに対して自動車事故死の割合は減少していない。

保育所や幼稚園の保護者による「交通安全母の会」の活動と地域の道路環境及び交通標識の整備とが連動して、子どもの飛び出し・車の前後の横断・道路での遊びによる事故防止に効果をあげてきた。しかし、車の中への置き去り・いたずらによる窒息・走行中ドアから投げ出される等、車の装備の多様化と保護者の不注意とが相乗して車内での事故が増加しているという⁴⁾。

溺死においても河川・池・海等とともに浴槽等による家庭内の水死も多いこと⁵⁾、並びに、最近では家庭内にある様々な洗剤に代表される中毒事故、住宅の高層化による転落落下、火傷等生活構造の変化による不慮の事故も多くなっている。これらは、保護者や大人の不注意によっていることは周知のところである。

幼児期の特性・性格、保護者の養育態度、安全対策や安全への意識および環境・地域とさまざまなレベルでの検討が従来からなされている^{6, 7, 8)}。

また、小児科医・耳鼻咽喉科医・救急外来診療科医を中心に、あるいは保健所独自に幼児の事故減少への取り組みがなされており、幼児の安全教育と保護者の安全意

識を高めることが提唱されている^{9, 10, 11)}。

幼児保育教育での健康領域では、身体機能・食行動・心身症に関する研究が多く¹²⁾見られるように、どちらかといえば健康生活に重心が置かれやすく、安全能力の育成や養育者の安全意識の啓発にまで届いていないのが現状のようである。

しかし、どんなに万全の対策を講じても事故は発生するであろう。大事に至らないようにすることが課題である。

従来、事故を未然に防ぐという予防対策に重点がおかれてき、中でも環境整備が中心であった。今後は、子どもと保護者の安全能力の育成が課題であると考ええる。

そこで、集団保育教育の場で子どもの安全性を高めるために、子どもと保護者にどのような能力の育成が必要であるかを検討することを目的とした。その前段階として、保護者がどのような安全意識をもっているのかを明らかにし、これらの意識が子どもが今まで受けた事故と関わりがあるかどうかの検討を行うこととした。

2 対象と方法

島根県の県庁所在地松江市にある公立の2幼稚園の保護者（主に母親）を対象とした。市内には堀割はあるが、本格的な川は対象とした校区にはほとんどない。しかし、交通量は増えており、交通事故は多発している。2幼稚園とも校区内に田畑・住宅地（団地）・公園・国道・商店等を持っている。

調査は、質問紙法を用いた。質問紙は大きく三部からなっている。一部は、母親たちの安全に対する意識をみるもので、諸研究を参考に30項目を作成した。これら30項目について「よく心がける」から「全く心がけない」の4段階の評定を求め、4点満点で得点化を行った。二部は、骨折・やけど・誤飲窒息・中毒・転落落下・交通事故・水難事故についてこれまで出会った回数、そのと

*1 島根大学教育学部

*2 島根県立松江農林高校

きの年齢、場所、同伴者の有無、原因等を求める項目である。三部は、現在の住まい状況、家族構成等環境を求めたものである。

配布数352部のうち291部の回収（回収率約83%）を見たがこのうち意識をみる30項目全てに回答している270部について分析考察する。調査は平成6年9月に実施された。

本報告では、母親の安全意識と事故経験との関係に焦点を当てて報告する。幼児の事故の状況並びに保護者の意識に関して男女児で差異がみられなかったためとめて考察する。

対象者の概要は表1である。

男女児ほぼ半数。一人っ子と長子が40%、中間子15%、末子46%、核家族77%、一戸建て住宅居住者55%である。

3 結果および考察

a 事故の実態

a-1 事故数

骨折・やけど・誤飲窒息・転落落下・交通事故・水の事故の6種について現在までの経験者数を見たものが表2である。やけど経験者は93人、転落落下経験者は74人とこの二つの事故を対象児の三分の1が経験している。

表1 対象者の概要

性別		家族構成		きょうだい位置			住宅形態		
男子	女子	核家族	拡大家族	長子	中間子	末子	一戸建て	高層住宅	他
130	138	209	61	107	40	123	149	118	3
(48)	(51)	(77)	(23)	(40)	(15)	(46)	(55)	(44)	(1)

表2 事故の実態

事故の種類	回数			事故にあった年齢					場所		
	1回	2回	3回以上	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳以上	室内	室外	不明
骨折	9	1	0	0	1	3	3	4	4	7	0
誤飲	21	1	1	2	7	3	6	9	18	6	0
転落	52	18	4	4	28	20	16	32	52	39	0
やけど	77	14	2	5	26	21	17	43	83	23	5
交通事故	7	0	1	2	0	1	4	3	0	10	0
水の事故	2	1	0	1	0	0	1	2	2	2	0

男児の方にやや転落落下者が多くみられたがほとんど男女差はみられない。最近増加傾向にあるといわれる「誤飲」は24名が経験している。約9%と転落ややけどと比較すれば少ないといえるが、平成4年度には0歳児240人が機械的窒息で死亡している¹³⁾ことや、「死亡1に対して後遺症の見られる誤飲（機械的窒息）事故は150倍、さらに家庭などで処置を必要とした事故は1500倍はあると推定している」と田中が述べている¹⁴⁾ように、一歩間違えば命を落とす事故であるため注意が必要であろう。

a-2 事故を経験した年齢

これらの事故を何歳の時に経験しているか見ると、交通事故や骨折はどちらかといえば外遊びが多くなる年齢2歳以降に多くみられるが、誤飲・転落及びやけどは、どの年齢にもみられることから、起こしやすい年齢はない一要素するにどの年齢も要注意といえよう。

a-3 事故が起こった場所

事故が屋内で起こったのか屋外で起こったのかをみると、交通事故を除いてほとんど屋内で起こっている。屋内では、転落落下の場合を除いて圧倒的に居間での事故が多い。特に年齢が低いほど居間や台所での発生である。転落落下では、屋内では階段からの転落が、屋外では遊具からの転落が目だつ。2歳を過ぎると外遊びが多くなるからであろう遊具からの転落が増えている。屋外で起こったやけどは、外食中のものと火花によるものである。

交通事故に対する取り組みは、前述したようにPTA活動として成果をあげているといえるが、3歳児、4歳児の飛び出し事故、自転車の荷台での足をはさむ事故、車に搭乗中の追突事故等がみられる。

水難事故は、風呂で2件、海水浴場で2件発生している。幸いどの事例も大事に至らなかった。

b 安全意識

b-1 安全意識の状況

母親たちが子どもの安全についてどのような意識を持っているかを見るために設定された30項目の平均点と標準偏差を算出したところ表3の結果を得た。

表3 安全対策意識

最も得点の高い項目は、「子どもだけで往來の激しい道路を自転車に乗らせない」「子どもの花火に付き添う」「子どもだけで川や池に行かせない」で、3.94点以上である。3点以上の項目は30項目中17項目あり、全体に心がけている項目が多いといえよう。

意 識 項 目	$\bar{X} \pm SD$	未経験者(N)と経験者(Y)間				
		骨 折	やけど	誤 飲	転 落	交通事故
机等の角の安全対策	2.54±0.79					
額などの落下防止	2.81±0.83	N>Y*				
危険カ所の点検修理	3.38±0.65					
ピーナッツ等食べさせない	1.94±0.81					
浴槽に水貯めたままにしない	2.61±0.96					
薬・洗剤子どもの手の届かないところに	3.40±0.78					
タバコ・マッチ・刃物の整理整頓	3.81±0.40					
はさみや包丁を積極的に使わせる	2.98±0.66					
マッチのすりかた教える	1.52±0.77	N<Y*				
子どもの服装体に合わす	3.29±0.66			N<Y**		
子どもを一人でお使いに出す	2.25±0.96					
自動車の助手席に子どもを乗せない	2.90±0.94					
駐車中の車に子どもだけ残さない	3.51±0.68					
多少の怪我を気にするより自由に遊ばせる	1.72±0.65	N<Y*				
友達の家に行くとき送り迎え	3.55±0.68					
必要なとき以外コンセントは抜く	2.58±0.86					
テレビ等電気製品のコードは短く	2.55±0.82					
アイロンかけは子どものいないところで	3.19±0.86					
扇風機に網をかぶせる	2.57±1.12				N<Y*	N>Y*
ストーブに安全柵を	2.83±1.09					
必要なとき以外ポット「出ない」に	3.74±0.62				N<Y**	
子どもの花火に付き添う	3.96±0.29					
階段やベランダで遊ばせない	3.17±0.83				N<Y*	
道路歩くとき手をつなぐ	3.47±0.59		N<Y*			
子どもだけで往來のはげしい道路を 自転車に乗らせない	3.96±0.20					
川や池に子どもだけで行かせない	3.94±0.23					
遊びに行くとき場所・友達・帰宅時間の 確認	3.84±0.39					
体験やテレビニュース等を通して 「危ない」を学習させる	3.68±0.51					
標識・信号の見方、事故の種類や原因等の 安全の知識を教える	3.59±0.57					
車の乗降、道路の横断、自転車の乗り方の 安全な方法を教える	3.78±0.43		N<Y**			

* P<0.05

** P<0.01

あまり心がけないとする項目は、「マッチのすりかたを練習させる」「多少の怪我を気にするより自由に遊ばせる」「ピーナッツ等を食べさせない」の3項目である。現代生活にはほとんどマッチを使うことはなく、また、幼児にはマッチの使用は不必要なことでありかえって火災ややけどの原因にもなりかねないことから、保護者の意見としてこのように出てきたことは当然と言える。

「多少の怪我を気にするより…」は、安全への配慮をせずに放任しているともとれるが、自由な遊びの中から自然に安全能力を獲得させるのだという意識から出ているものであろう。

b-2 事故の経験と安全意識

それでは、事故を経験した子どもを持つ母親の意識は、経験しない子どもを持つ母親の意識と異なるのであろうか。表3には、それぞれの事故経験者と未経験者間のt検定の結果を表したが、9項目で有意差がみられた。骨折に「多少の怪我を気にするより自由に遊ばせる」が関連している以外は、それぞれの事故に直接関連する項目は見られない。

そこで、いずれかの事故を重複して経験した者とそうでない者では意識に違いがみられるかみたと、表4に示すように、5項目で未経験者より重複経験者の方が意識が高いことが判明した。しかし、これらの項目に系統性がみられないこと、重複数が増えるに従い必ずしも

意識が高くなるとは限らないことから、事故経験は母親の意識を特別に高めるとは限らないといえるのではなからうか。

以上のことを総合すると、母親たちに安全に対しての確固たる考えがないのではないかと推察する。人間は大なり小なりの怪我をしながら成長するものであり、生活の中で完全な安全を求めることはできないと認識しているからであろう。

さて、危険より遊びと考える母親の子どもに事故発生が少ないという報告¹⁵⁾と多少の怪我を気にするより自由に遊ばせる母親とそうでない母親間には子どもの事故に差がないという報告¹⁶⁾とがみられる。

本調査の母親たちはこの点についてどう認識し、子どもの事故とどう関係しているのであろうか。事故経験者と未経験者間あるいは事故を重ねて経験した者間いづれにおいても意識に差異はみられなかった。つまり、自由に遊ばせることと事故との関係は前述した骨折以外本調査ではみられない。須永らの親の安全認識および養育態度と幼児の安全行動との関係を見た研究においても、明確な関係が見いだされなかったと報告されている^{17, 18)}。

どうも母親の意識や養育態度と子どもの事故とは関係がないのではないかと考える。子どもの事故を予防する安全意識を育てるには、意識を向上させ養育態度に注意を向かわせるだけでなく、環境や子どもの性格等総合的に取り組む必要があるようである。また、どのような意

表4 事故重複経験者と未経験者間の意識差

項 目	経 験 無 し	1 種 経 験	2 種 経 験	3 種 以上 経 験
	$\bar{X} \pm SD$	$\bar{X} \pm SD$	$\bar{X} \pm SD$	$\bar{X} \pm SD$
子どもの服装体に合わず	3.23±0.74	3.35±0.61	3.27±0.54	3.71±0.48
子ども一人でお使いに出す	2.26±0.95	2.15±0.93	2.38±1.02	3.00±0.81
駐車中の車に子どもだけ残さない	3.14±0.74	3.60±0.60	3.58±0.66	3.42±0.53
必要なとき以外ポット「出ない」に	3.61±0.80	3.86±0.40	3.83±0.37	4.00±0.00
川や池に子どもだけで行かせない	3.94±0.23	3.96±0.17	3.90±0.29	4.00±0.00

* P<0.05

** P<0.01

*** P<0.001

識を育てるべきか意識項目を精選していくことも必要である。

4 要 約

子どもの事故死の比率を下げるのが課題となっており、この課題の解決には、子ども自身の安全能力の育成と保護者の安全意識の高揚が必要であるといわれている。北欧並の事故死亡率に引き下げることを目標にさまざまな努力が成されており、乳児健診時の保護者への指導は効果をあげている。今後こうした指導を幼児保育教育機関で行っていくためには、日本の母親の「安全」に対する意識の特徴を掴み指導のあり方を考慮していくことが必要である。

そこで、幼児期の子どもをもつ母親は、どのような安全意識をもっているのか、いままでの事故経験と関係が見られるのかいなかを270人の母親の意識から見たところ次のような知見を得た。

- 1) やけどと転落落下経験者が3割近くいる。誤飲経験者は1割弱である。
- 2) 事故はどの年齢でも起きている。
- 3) 屋内と屋外では屋内の事故が多い。中でも居間、台所で起きている。
- 4) 転落落下では、屋内では階段、屋外では遊具からである。
- 5) 屋外でのやけどは、外食中のものと花火によっている。
- 6) 「子どもだけで往來の激しい道路を自転車に乗らせない」「子どもの花火に付き添う」が、最も意識の高い項目である。
- 7) 反対に意識の低い項目は、「マッチのすりかたを教える」である。
- 8) 事故経験者は、9の意識項目で未経験者との意識差がみられる。
- 9) 3種の事故を重複して経験した者は、4項目で未経験者と意識差がみられる。
- 10) しかし、事故に直接関連する意識項目との関係はみられない。

以上である。

事故を経験させたから子どもの行動に消極的になり、過保護にしているかといえそうともいえず、では、積極的に遊ばせたり道具を使わせているかといえそうともいえない。ある保育所の保母は、わが子が列車事故に遭遇しているにもかかわらず列車が通過する時刻に通園させるその心境が理解できないと嘆いて話したが、このように最近の保護者の中には保育者の注意や指導に耳を

傾けない者が多く、保育者は無為感を深めている。

これは、保護者への教育がいかにむずかしいかを示しているように思われる。

また、事故率が高いといっても、毎日子どもの身近で起きているわけではなく、たまたま運の悪い人が出会ったことであり、わが子には起こらないであろう、という甘い意識に一般に支配されているものである。だから、一貫した傾向がみられないのであろう。ここに、保護者の教育の課題があると考えられる。

今回取り上げた安全意識を見る項目は、乳児から幼児期までの広い範囲を含んでいたことや対象人数も少なかったことから、項目を整理して日本の保護者の意識の特徴をさらに明確にしこの課題を掘り下げる。また、日本の保護者の意識を明確に捉えるために他国との比較検討を行うことを今後の課題としたい。

最後に、調査にご協力下さいました保護者の皆さま、労をお取り下さいました幼稚園の職員の皆さまに厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- (1) 清水玲子：「無傷」で育てたい [1]，ちいさいなかま，No.316,50-52,1995
- (2) 清水玲子：「無傷」で育てたい [2]，ちいさいなかま，No.317,52-54,1995
- (3) 厚生省の指標「国民衛生の動向」，第41巻第9号，厚生統計協会，東京，1994
- (4) 川島秀二，星美智子，湯川礼子他：親の安全認識度に関する研究(1)，日本保育学会第42回大会研究論文集，410-411,1989
- (5) 田中晴美，林隆，市山高志：溺水患児17例の経験，小児保健研究，49，477-479,1990
- (6) 赤塚展子，野本智子，林克昌他：不慮の事故と幼児の特性，日本小児保健学会第39回抄録集，410,1992
- (7) 田中哲郎，高橋裕一郎：月齢別事故の頻度と母親の意識調査，日本小児保健学会第39回抄録集，418,1992
- (8) 神保英夫，山本保，高野陽他：都市幼児の健康・安全行動の形成における母子相互作用に関する研究，厚生省心身障害研究，172-182,1981
- (9) 田中哲郎，木ノ上啓子，宮原真智子他：小児期の不慮の事故の検討，日本小児保健学会第34回講演集，D-21，1987
- (10) 小猿久美，竜田登代美，西裕子他：小児事故防止のための保健指導（第1報）（第2報），日本小児保健学会第39回大会抄録集，421-422,1992

- (11) 牧野尚, 田中哲郎: 不慮の事故死亡率の推移に関する国際比較, 日本小児保健学会第39回大会抄録集, 411,1992
- (12) 橋口英俊: 健康, 児童心理学の進歩 1990年版, 金子書房, 東京, 26-53,1990
- (13) 国民衛生の動向, 前掲書(3)
- (14) 田中哲郎他: 前掲(9)
- (15) 梅原五月: 幼児の事故防止と安全行動に関する母親の養育態度についての調査研究, 高知女子大学保育短期大学部紀要, 第6号,59-68,1982
- (16) 石津博子: 小児の事故と保護者の意識, 小児保健研究, 52,438-446,1993
- (17) 須永進, 星美智子, 湯川礼子他: 親の安全認識度に関する研究-幼児をもつ母親を対象に-(2), 日本保育学会第42回大会研究論文集, 412-413,1989
- (18) 斉藤幸子, 星美智子, 湯川礼子他: 親の養育態度と幼児の安全行動(第3報), 日本保育学会第44回大会研究論文集, 204-205,1991